

接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴

—日本語母語話者と比較して—

深川 美帆

キーワード 談話、接続表現、ソ系指示詞、「という」、「それで」

1. 研究の目的

日本語学習者の口頭能力をインタビューなどで測る場面で、質問されたことについて、ある程度の長さをもち、内容的にもまとまった話ができるかどうかを見ようとすることがある。しかし、学習者がこうした、まとまった話ができるようになるためには、どのようなことができなければならないのか、どんな指導が必要かということについては、まだ十分に明らかにはされていない。そこで、本稿では、談話における接続表現に注目し、日本語学習者の談話がどのような言語形式を用いて組み立てられているのか、そこに学習者に特徴的な現象が見られるか、見られるとすれば、それはどのようなものかを考察する。分析の対象とするのは、1対1のインタビューにおいて、学習者が自分の体験や出来事を語ったり、自分の考えを述べたりする場面における発話である。インタビューという相互作用がある対話場面であっても、自分の体験や思考の内容を相手に伝える必要がある場合には、話し手が主体的に話を組み立てて、話をする必要がある。なお、節や文の接続には様々な言語形式が用いられるが¹⁾、本稿では、文と文あるいは節と節の間に位置して、それらの意味内容を関係づけ、より大きい意味のまとまりとして結びつける言語形式である、「接続詞」、「接続助詞」、「述語の活用形」を分析対象とし、これらをまとめて「接続表現」²⁾と呼ぶことにする。

2. 先行研究

齋藤(1993)は、ACTFL-OPI³⁾の中級の上レベルと上級の下レベルの日本語学習者各3名の発話で、どのような言語形式が使われているかを、接続語句、指示詞、複文、文末表現について分析した。その結果、1) 中級の上レベルで

は、「でも」「そして」などのやさしい接続語句を多用するが、上級の下になると、使える接続語句に変化が見られること、2) 上級の下レベルになると、「その」「そういう」などの「ソ」系の指示詞の使用が見られること、3) 上級の下レベルのほうが複文の割合が増えていることなどを挙げている。

萩原他(2001)は、ACTFL-OPIの上級、超級日本語学習者各4名の発話と母語話者2名の発話を、話題の種類と述べ方によってグループ分けし、それぞれにどのような特徴が見られるかを調べた。それによると、学習者の使用する接続助詞は上級、超級、母語話者の間であまり差がなかったが、接続詞は上級と超級ではかなりレベルの差が見られ、超級と母語話者の接続詞の異なり語数はほぼ同じだったことを挙げている。

これらの研究では、学習者のレベルが上がると、使える接続表現にも広がりが見られることが窺える。しかしながら、分析対象とした学習者の数は限られており、さらに上級レベルの学習者の発話データを収集し分析を積み重ねていくことは意義があるといえよう。そこで、本稿では、上級日本語学習者と日本語母語話者の談話における接続表現の使い方を比較し、学習者にはどのような特徴があるのか調べ、今後、彼らにどのような指導が必要かを考えたいと思う。

3. 分析

3. 1. 分析方法

分析の対象とするのは、上級日本語学習者10名と日本語母語話者5名のインタビュー場面での発話資料である。彼らに、いくつかの話題についてインタビューと話をしてもらい、それをMDレコーダーで録音した。録音した音声は書き起こしをし、その資料をもとに分析を行った。そして、学習者の発話と日本語母語話者の発話で使われている接続表現を拾い出し、その使用状況に違いがあるか、あるとすれば、どのような特徴があるのかについて分析した。

3. 2. 調査参加者

学習者は、日本国内の日本語教育機関で、大学進学のための予備教育を受けている中国語を母語とする学習者10名である。滞日期間は約12ヶ月から18ヶ月で、調査時において全員が日本語能力試験1級に合格している。インタビューは、2004年3月と2005年3月に行った。

日本語母語話者は、日本国内の大学院に所属する日本語母語話者5名(すべて女性)である。インタビューは、2003年1月に行った。

表1 日本語学習者について

背景	日本国内の日本語教育機関で、大学進学のための予備教育を受けている中国語を母語とする学習者
人数	10名（男性7名、女性3名）
レベル	上級（日本語能力試験1級合格者）
滞日期間	12～18ヶ月 授業を受けた期間は11～16ヶ月

3. 3. インタビューの内容

インタビューは、主にインタビュアーが以下の事柄について質問し、それについて話してもらうという形式をとった。そのインタビューの中で、表2に挙げた質問項目についての発話を抽出し、分析対象とした。質問項目には、自分の体験と意見を述べるものを選んだが、学習者と日本語母語話者で状況が異なるものについては、それぞれの状況に合う質問をした。

表2 インタビューでの質問項目

日本語学習者への質問	日本語母語話者への質問
「日本に来て、困ったことはどんなことですか。」	「外国へ行って、困ったことはどんなことですか。」
「日本に来て、驚いたことはどんなことですか。」	「外国へ行って、驚いたことはどんなことですか。」
「日本に来て、うれしかったこと（楽しかったこと）はどんなことですか。」	「外国へ行って、うれしかったこと（楽しかったこと）はどんなことですか。」
「日本とあなたの国で、とても違うのはどんなことですか。」	「日本と外国で、とても違うのはどんなことですか。」
「日本の若者と中国の若者を比べると、どうですか。違うところがありますか。」	「日本の若者和其他の国の若者を比べると、どうですか。違うところがありますか。」
「田舎に住むのと都会に住むのと、どちらのほうがいいですか。」	「田舎に住むのと都会に住むのと、どちらのほうがいいですか。」

4. 結果と考察

4. 1. 接続表現の使用状況

表3は、今回の発話資料に現れた接続表現の学習者ごとの使用数である⁴⁾。全体的に見ると、日本語母語話者はもちろん、学習者も接続詞や接続助詞などを使って、単文だけではなく複文を作って談話を形成していることがわかる。

しかし、学習者を見ると、C2、C4、C8のように、使用する接続表現の数が少ない学習者もいた。

表3 接続表現の使用数

接続助詞類	学習者										母国話者						
	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	C10	計	J1	J2	J3	J4	J5	計
接続詞類	44	15	25	15	47	24	33	18	43	43	311	73	69	55	46	136	379
合計	57	18	34	23	59	34	38	21	54	60	398	103	83	77	55	166	576

4. 2. 接続助詞類の使用の特徴

表4は接続助詞、動詞の活用形など（以下、接続助詞類と呼ぶ）を使用数の多い順に並べたものである。

表4 接続助詞類の使用数（使用数の多かったもの上位10位まで）

日本語学習者			日本語母語話者		
順位	接続助詞類	使用数	順位	接続助詞類	使用数
1	～て	80	1	けど・が	85
2	けど・が	40	2	～て	82
3	とき	34	3	ので・んで	47
4	から	28	4	と	35
5	～たら	21	5	～し	31
6	～し	19	6	～たり	16
7	ので・んで	15	7	～たら	15
8	～なくて	13	8	～なくて	15
9	とか	8	9	とか	13
10	～たり	7	10	から	11

これを見ると、日本語学習者も、日本語母語話者も、よく使用している接続助詞類の種類は同じものが多い。日本語学習者も日本語母語話者も、テ形接続⁵⁾や、接続助詞「けど」「が」⁶⁾などの表現（以下、「けど」とする）を多く用いていることがわかる。

さらに、それぞれの学習者の発話を詳しく見ていくと、テ形接続や「けど」などの接続助詞を使って、一つの談話の中で一文一文切らずに話している学習者と、それらをほとんど使わず、単文と単文とを接続詞を使ってつないでいる学習者の2つのタイプに分かれた。

次の発話例(1)は、テ形接続や「けど」などを使って、文をつないで話すタイプの例である。

(1) [国の若者と日本の若者について]⁷⁾

C7: 実は悪い日本の若者を見たこともあります。電車に乗ったときは、一人で、一人で席は全部使っているし、飲み物のプラスチックを飲んだらすぐこの何も考えないで、勝手に捨てるし。でも中国よりずいぶん少ない、ずいぶんじゃない、ずっと少ない。中国で悪い中国人だったら、そういうことを習慣みたくにする。わたし中国人でも、すごくいやですが、しょうがないので。わたし自分で解決したいけど、能力ないです。

このように、単文で区切らずに接続助詞やテ形接続を使って発話をつなぐ話し方は、日本語母語話者にもよく見られる話し方である。

次の発話例(2)は、テ形接続や接続助詞をあまり使わず、文と文とを接続詞を使ってつないでいく学習者の発話例である。

(2) [国の若者と日本の若者について]

C2: 日本の若者はよくたばことかお酒とかします。中国の若者は家の父母学校の先生とかととっても厳しく、許せてもらえない。でも学生時代は日本ある法律がある。禁煙とか酒飲むこととか。だから学生あまりお酒飲まない。自由ではないけどそんな厳しくない。

このようなタイプの学習者は、時折接続助詞を使ってはいるが、発話全体を見ると、単文を並べて前後の意味関係を接続詞で表すパターンが多い。今回分析した学習者のうち、特にC2、C4、C8の3名の学習者は、他の学習者に比べて使用している接続表現の数も少なく、彼らの発話において、このパターンがよく見られた。このように、2つのタイプがあるものの、ほとんどの学習者はテ形接続や「けど」の接続表現を使って、発話をつないでいることがわかった。

日本語学習者の発話ではテ形接続が「けど」よりも多かったのに対し、日本語母語話者の発話では、テ形接続と並んで「けど」の使用が多い。日本語学習者には「けど」を使用する学習者としなない学習者がいたが、日本語母語話者は全員よく使用していた。さらに、「けど」には、逆接、対比、補足、前置き等の用法があるが(森田1980ほか)、日本語学習者の発話で使われているのは、多くが逆接の用法であり、日本語母語話者は逆接以外の用法も見られた。特に、日

本語母語話者の発話では、発話例(3)のように自らが述べる内容を補足する用法や、発話例(4)のように「けど」で言いさす用法が多くみられた。

(3) [住んでいた外国の町について]

J 5 : で、最近だいぶ便利にはなってきたんですけど、やっぱりお店に置いてある品物とかも言い方が悪いんですけど、ちょっと質が違うかな。

(4) [外国に行って困ったことについて]

J 3 : だから、その通訳の人がすべて、あの、いろいろ手配してくれたので、うん、特に困ったってことはなかったんですけど。

日本語学習者と日本語母語話者の文末の「けど」を、OPIデータをもとに分析した石川(2005)においても、日本語の能力が上級、超級と向上するに従い、文末の「けど」の使用状況が日本語母語話者に近づき、意見や感情を述べる際や聞き手の意見を否定する際に話し手のためらいを示すなどの心的態度を表出する例が多くなっていることを述べている。今回の日本語学習者の発話において、このような用法は限られた学習者にしか見られず、使用数における割合も多くはなかった。

日本語母語話者と日本語学習者とで、違いが見られたものに、時を表す副詞節「とき」がある。日本語母語話では使った人と使わなかった人がいるのに対し、日本語学習者は全員が使っている。学習者の使い方を見ると、「日本に来てうれしかったことはどんなことか」のように、学習者の体験について語ってもらう場面では、発話例(5)のように、「…とき、うれしかった」のように、うれしかったのはいつ、どんな場面なのかを「とき」を使って述べる学習者が多かった。

(5) [日本の生活でうれしかったことについて]

C 6 : そのとき1級の成績を発表するとき、その1級は、やっぱり自分の1年の能力をして、その証明のものとして見て、とてもうれしかった。

これに対し、日本語母語話者の発話では、「とき」を使って述べる場合もあるが、発話例(6)や(7)のように、「～のは」や「～んですけど」など、「とき」以外の表現を使って話を進める例も見られた。

(6) [外国の生活で困ったことについて]

J 1: 例えばですね、最初に困ったのは、道路が渡れなくて。もうみんな信号あるんですけど、守らないので。

(7) [外国の生活で驚いたことについて]

J 2: 私、(外国の大学で) 授業取ったんですけど、最初、なんかね、無視されたりとかあるですよ。

条件を表す場合に、日本語母語話者の発話では「と」と「たら」が用いられているのに対し、日本語学習者の発話では「たら」の使用が多かった。また、原因・理由を述べる場合に、日本語母語話者は「ので」のほうを「から」より多く使っていたのに対して、日本語学習者のほうは「から」の使用数のほうが多かった。これらは、初級修了レベルの日本語学習者の接続表現を縦断的に分析した深川(2002)においても指摘されている。

学習者が、条件を表す場合によく「たら」を使うのは、「たら」は他の条件表現に比べて後件に制約が少なく、使える範囲が広いこと⁸⁾から、学習者は「たら」をよく使用するのではないかと推察される。

「から」をよく使うことについても、「ので」に比べて制約が少ないこと⁹⁾が考えられるが、加えて、今回の学習者は「から」は「ので」よりも先に導入された。そのため、学習者にとって練習の機会が多く、「ので」よりも定着しやすかったのではないかと推察される。また、今回の発話資料では、インタビュアーと母語話者の親疎の度合いが影響していることも考えられる。学習者とインタビュアーは、1年から1年半にわたって継続的に接していたが、日本語母語話者とインタビュアーはそれほどまでの接触はない。それで、日本語母語話者のほうは、丁寧さを表すために「ので」を用いることが多かったのではないかと考えられる。

4. 3. 接続詞類の使用の特徴

次に、表5の接続詞の使用数を見ると、日本語学習者がよく使っているのは「でも」「だから」「あと(は)」の3種類で、使用数のほとんどを占めているのに対し、日本語母語話者は、日本語学習者が使っているこれらの接続詞に加えて、様々な接続詞を使っていることがわかる。

表5 接続詞類の使用数(全て)

日本語学習者		日本語母語話者	
接続詞類	使用数	接続詞類	使用数
でも	51	で・それで	47
だから	13	でも	19
あと(は)	10	あと(は)	15
たとえば	5	だから	9
なぜかというと	3	けど	3
それに	2	たとえば	3
そして	1	しかも	1
それと	1	それに	1
じつは	1	それでも	1
		それとも	1
		そうすると	1
		そしたら	1
		なので・なんで	1
		ただ	1
		というか	1

特に、日本語母語話者の発話では、「で」¹⁰⁾「それで」が47例見られたのに対し、学習者の発話では見られなかった。日本語母語話者の発話でみられた「それで」「で」の使い方は、以下の発話例(8)のような例である。

(8) [外国に行って、驚いたことはどんなことですか]

J1: アメリカの時はですね、靴を買ったんですよ。サンダルを買って、けっこうかわいくて安くてすごいアウトレットのお店だったんですけども。で、それで、買って、で、すごい上機嫌で、で、ホテルに帰ったんですけど、ホテルに帰って見てみたら、左右おんなじ向きのくつが入ってたんですよ。で、もう日本ではありえないと思って、かなりもう怒りつつ行ったんですよ。タクシー代もかかるし。で、手間もかかるじゃないですか。で、そしたらそれを見せたらすごい笑われて、店員さんにごめん sorry, sorry みたいな。

「それで」は、主に因果関係を表す接続詞として分類されているが、それ以外に、特に話し言葉においては、話の展開に使われることが指摘されている(有

賀1993、佐久間1992)。本稿の調査では、母語話者5人全員の発話で「それで」「で」が見られたのに対し、学習者の発話では見られなかった。次の発話例(9)は、「うれしかったできごと」について日本語学習者が自分の経験を語っている部分である。

(9) [日本に来てうれしかったことは何ですか]

C1: いい経験があったんですけど、この前東京行ったとき、友達とあの、ユーフォーキャッチャーしたんですよ。あの、いっぱい、そのとき運がいいか、その日はついてるので、いっぱいユーフォーキャッチャーがとった。そのあと、めぐり会いがあって。なんか、東京の駅で、あ、東京じゃない新宿の駅の前で、一人の女の歌手がそこで歌って、あの、歌っている。そのときCDとかとサイン、写真も撮って。それはそのときはすごくうれしいなとおもって。

上の発話の中で、いっぱいユーフォーキャッチャーをとった話から、さらにその日の「運がいい」話へと話が進む箇所がある。ここは、「それで(で)、そのあと、めぐり会いがあって・・・」というふうに、「それで」を用いて談話を展開するほうがより自然であるが、この学習者の発話には現れていない。学習者の発話の指導では、このような談話展開にかかわる接続詞の用法にも注目して、指導を行う必要があるのではないかと思う。

以上、日本語学習者が使用した接続表現を、日本語母語話者が使用した接続表現と比べることによって、日本語学習者の談話における特徴を明らかにした。次に、さらに発話資料を分析した結果、これらの接続表現を使う以外の方法で談話をつないでいる例について考察する。

4. 4. 学習者の発話にみられた、談話をまとめるストラテジー

日本語学習者は、母語話者と同じく、テ形接続やその他の接続助詞を使って発話をつないでいるが、節や文以上の、談話としてのまとまりという点から見ると、日本語母語話者にはあまり見られない使い方をしている例が見られた。今回の日本語学習者によく観察された文と文とのつなぎ方は次の(10)(11)のような発話例である。

(10) [日本で驚いたことはどんなことですか]

C1: 東京へ行って、人がほんとにいっぱい。それはちょっとびっくりし

た。

(11) [日本の生活で驚いたことはどんなことですか]

C 6 : 日本に来て、日本の地震はその1年間は4つか5つかのところを全部地震起こりました。そして全部5級以上。それはびっくりしました。わたしは中国に住んでいるところはあんまりほとんど地震がないです。でも日本は一年間でいろいろなところで地震が起こって。そのことはすごくショックです。

例(10)は、「東京へ行って人が本当にいっぱいいたこと」で、一度文を切り、次の文の最初に「それは」という指示詞をつけて前の文の内容を指すことで、2つの文を関連付けている。例(11)も同様で、例えば、「日本は一年間でいろいろなところで地震が起こって」と「そのことはすごくショックです。」を「日本では1年間でいろいろなところで地震が起こった(という)ことはすごくショックです」という言い方もできるが、「起こって」と動詞のテ形接続で文を切り、後続の文で「その」「そういう」といったソ系の指示詞やそれを含む表現を用いて、前後の文に照応関係を持たせることで、発話に関連を持たせている。もちろん、指示詞も談話にまとまりをもたせるための重要な役割をになう言語形式の一つであり、母語話者の発話にも、埋め込みを使わずに後続文で「その」「そういう」を使って発話を続ける話し方は見られる。しかし、日本語母語話者の場合は、そのパターンだけではなく、内容節¹¹⁾を形成する「という」に形式名詞「の」「こと」をつけて、文を切ることなく前に述べた事柄をまとめている例が多く見られた。例えば次の(12)(13)のような発話例である。

(12) [外国の生活で困ったことはどんなことですか]

J 4 : なんかもちょっとしたことでもすぐ宴席を設けてくれるような場合もあればなんか聞いても知らないって言って教えてくれないのもあって、どこがその境界で自分がどういうふうに自分が人と付き合って行けばいいのかかっていうのが一番困りました。

(13) [外国の若者と日本の若者の違い]

J 3 : アジア系以外の子たちだと、なんか言葉にはちょっと言い表しがたいいんですが、あ、やっぱりちょっと物の捉え方が違うんだなあっていうような感じが。なんかこう具体的にどこがって言われるとちょっとあれなんですけれども、なんか、んー、感覚がちょっと違うなっていうのはありま

す。

このように、「節＋という」という形で、その文を名詞化する例は、日本語母語話者の発話では全員から計38例みられたが、学習者の発話では、4名の発話から計7例しか見られなかった。母語話者が両方のパターンを持っているのに対し、学習者は「という」を使わず、もっぱら「それ」「その」などで受けるといふ、1つのパターンのみで発話を形成している。

では、なぜ学習者はこのようなパターンを多用するのだろうか。今回、調査対象とした学習者が受けた授業では、これらの言語形式は授業で扱っているので、知識としては持っているはずである。それでも使わないのは、以下の理由が考えられる。

一つは、「という」という言語形式については、知識としては習得しているが、このような発話場面では実際にどう使うのかという指導が足りなかったため、学習者の運用に結びついていなかったのではないかということである。「という」を導入する際、最初に導入したのは、「星の王子様という小説」のように、「名詞＋という＋名詞」の形式で、ものや人を話題に取り込んだり、聞き手がそれについてよく知らないと思われる場合に使われる用法であり、発話例(12)(13)の日本語母語話者に見られたような用法は、会話の授業でも積極的には練習しなかった。また、学習者は「の」や「こと」などを使って補足節は作っているが、「おどろいたこと」や「おもしろいのは」というふうに、「こと」や「の」が修飾する範囲が狭く、母語話者のように、一連の出来事を説明した上で、出来事や内容を最後にまとめあげるために使うことはしていない。したがって、このようなまとまった話をする場面において、これらの表現を、話を最後に集約する際にも使うということ、運用練習を通して学習者に提示する必要があったと思われる。

もう一つは、あえて「という」を使わなくても、文を並べ、その後続文で指示詞などを使って照応関係を表すことで、話したい意図が伝えられるので、わざわざ使う必要がないからではないだろうか。「節＋という＋の／こと」という文を作るには、「という」の前の述語を適切な形に換えて接続する必要があり、さらに「という」のあとには「の」「こと」など後続にどんな言葉が続くかを選択しなくてはならない。¹²⁾人は会話をするとき、前に話した内容を記憶しながら、次にどんなことを話すかを考えながら発話している。それに加えて、学習者の場合は第二言語で発話するときに、自分が話そうとすることを頭の中で第二言語に言語化していく作業をしなければならない。

認知心理学では、人間の情報処理は、統制的処理と自動的処理の2つの異

なった処理過程が並存することが指摘されている。統制的処理は処理過程に注意を払いながら行われる処理で、まだ十分に学ばれていない項目を処理する場合に典型的に現れる。統制的処理はワーキングメモリ¹³⁾上で行われ、その容量を消費するので、限られた処理しかできない。これに対し、自動処理は、処理過程に注意を払うことなく行われる処理で、適切な脈絡によって引き起こされ、自動的に機能する過程である(小池ほか, 2004:24-25)。学習者の場合、よほど習熟して自動化された言語形式でない限り、話す内容を考えるという処理と、言語形式の処理の両方を行うのは難しいことが推察される。文末に「という」をつける場合には、発話内容そのものについての処理の他に、その前の述語を適切な形に換えて接続するという処理が必要になり、その負荷は重くなる。こうした負荷を回避するため、あるいは負荷に耐えられないために、学習者は文を一旦終結させ、「その」などの指示詞を使って発話をつなぐというストラテジーを取っているのではないかと考えられる。

5. まとめ

以上、日本語上級学習者のインタビューでの接続表現について、日本語母語話者の使い方と比較し、日本語学習者の談話の特徴について述べた。今回の発話資料で観察された上級日本語学習者の特徴をまとめると、次のようになる。

1. 文と文をつなぐ際に、単文を羅列するだけでなく、接続助詞やテ形接続など、日本語母語話者がよく使うような接続表現を使って発話をつないでいる。中には接続表現をあまり使わず、接続詞で単文をつなぐ学習者もいる。

2. 談話展開の機能を持つ接続詞「それで」「で」の使用が日本語母語話者では多かったが、学習者の発話にはほとんど見られなかった。自分自身の体験や自分が知っている出来事、自分の意見などを、自分で主体的に話を組立てて相手に伝えていかなければならない場合、このような接続詞を使うことは、「語り」の場面において効果的であるが、学習者はそうした言語形式をほとんど使っていないことが明らかになった。

3. 日本語母語話者の発話では、「その町に図書館はあるけど、そこには本がほとんど置いてないというのには驚いた」のように、「という」を使って自分の話をまとめることが多くみられたが、学習者の発話では、そのような例はほとんど見られなかった。学習者の場合、一旦文を言い切るか、あるいはテ形接続で文を並べ、その後に「そういう」「それ」といった指示詞やそれを含む表現をつけて、それ以前に述べた内容を受けけることで、談話としてのまとまりを形成

するというパターンが多かった。

これらを見てみると、上級日本語学習者は、1文レベルでの文の接続はあまり問題がないが、文と文とが連なり、談話としてのまとまりを形成するための多様な言語形式はあまり運用されていないことがわかる。その理由としては、日本語学習者は、文レベルでの接続表現の運用練習はしていても、より大きい談話レベルでのこれらの言語形式の指導を受けることが少なかったことが一因であると考えられる。日本語学習者が、単なる受け答えだけではなく、より深い内容を表現豊かに語れるようになるには、談話としてのまとまりを形成するための多様な言語表現が使えることが必要であり、そのためにも、今回の分析で明らかになった、「…という」などの話をまとめあげる表現や、「けど」のように、聞き手への働きかけを表すような、談話に特徴的に見られる用法、「それで」などの談話の展開を促す表現についても指導が必要であると思われる。

注

- 1) 寺村 (1981: 12) は、文と文をつなぐ構文の形式的分類として以下の6つを挙げている。
 - i) 一つの文の文末の述語の活用形でつなぐ
 - ii) 接続助詞でつなぐ
 - iii) 一つの文を他の名詞の修飾節にする (文の連体節化)
 - iv) 一つの文を他の文の名詞的構成要素とする (文の名詞節化)
 - v) 引用 (文の引用節化)
 - vi) 接続詞でつなぐ

- 2) 佐久間 (2002) は、文章論、談話論における接続機能を有する語の総称として「接続表現」を次のように定義している。

接続表現とは、文章・談話論における接続機能を有する語句の総称であり、品詞論の接続詞、接続助詞や構文論の接続語、接続句に対する概念である。文章論のみならず、談話における「つなぎことば」も対象とするため、その範囲は文章論の接続語句よりもさらに広い。接続詞相当の働きをする副詞や名詞、連語、句・節・文・段レベルまでを含んでいる。(佐久間, 2002: 162)

本稿における「接続表現」の定義も基本的にこれに従うが、「接続詞相当の働きをする」ものは副詞、名詞、連語までとし、句以上のレベルは含まないことにする。

- 3) ACTFL-OPIとは、全米外国語教育協会 (American Council on the Teaching of Foreign Language) が実施する口頭面接テスト (Oral Proficiency Interview Test) である。
- 4) 接続表現の算出は以下のように行った。
 - ・ インタビュアーの発話の内容をおうむ返しに繰り返した場合は使用数に含めなかった。
 - ・ 発話者がある接続表現を何度も言い直した場合、最後に述べた形式のみを使用数に含めた。
- 5) 述語の活用形で、て形で終わるものを、以下「テ形接続」と呼ぶ。
- 6) 接続助詞「けれど」とその異形である「けれども」「けども」「けど」と、これらと本質的には同じ機能を持つ接続助詞「が」を以下、まとめて「けど」と記す。
- 7) インタビューでの発話例は、以下のように記す。
 - ・ [] の中の文は、インタビュアーがした質問内容を表す。
 - ・ C 1 は発話者の仮称を表す。C は日本語学習者、J は日本語母語話者を表し、番号は個人を表す。
 - ・ 学習者または日本語母語話者が話している途中で、インタビュアーが「うん」「へえ」などのあいづちをいれた場合があるが、発話例には載せていない。
- 8) 「たら」の典型的な用法は、一回的な依存関係を表す用法であり、仮定条件にも確定条件にも用いることができる。また、後件に話し手の意志、希望、命令、依頼などがくる文でも用いることができる (松岡, 2000:224)。
- 9) 「ので」は、後件に話し手の推量を表す文がくることができないが、「から」にはそのような制約がない。また、A 「どうして今日は図書館が込んでいますか。」 B 「試験が近いからです。」のように理由を尋ねる質問に対して答える場合には「から」しか使えない (松岡, 2000:213)。
- 10) 「で」とは、「それで」の「それ」が省略されたものである。
- 11) 複文の分類基準や名称は、益岡・田窪 (1992) に従う。
- 12) 市川 (1997:302) でも、「文+という」の文を作る際に、「という」が抜け落ちたり、文は作れても「の」「こと」など後続の語を混同したりする誤用が挙げられている。
- 13) ワーキングメモリは、言語理解や推論などの人間の高次な認知活動と関連する記憶のモデルとして、従来の、脳の短期記憶の概念をさらに拡大して、課題遂行に対処する処理機能の役割を補充したものである。ワーキングメモリは、人間のさまざまな行動場面での情報処理の一時的な保持を行うこ

とにより、情報の処理と保持の並列処理を支え、目標の達成に向かって行動を維持する役割を担っている。ワーキングメモリの処理資源には制限があると考えられており、したがって、認知課題の要求する情報の保持および処理の量が多ければ多いほど、処理資源は限界に近づくこととなる。ワーキングメモリ処理資源が限界に近づくと、認知課題の遂行に制約が生じる。たとえば、情報処理の速度が低下したり、誤りが増加するようになり、認知活動にさまざまな障害が出てくる（苧阪，2002：20，37）。

参考文献

1. 有賀千佳子（1993）「対話における接続詞の機能について—「それで」の用法を手がかりに—」『日本語教育』79号：89-101，日本語教育学会
2. 石川智（2005）「文末表現「けど」のポライトネス—OPIから見た母語話者と学習者の使用状況—」鎌田修・筒井通雄・畑佐由紀子・ナズキアン富美子・岡まゆみ編『言語教育の新展開—牧野成一教授古稀記念論集—』ひつじ書房
3. 市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社
4. 荻原稚佳子・齊藤真理子・増田眞佐子・米田由喜代・伊藤とく美（2001）「上・超級日本語学習者における発話分析：発話内容領域との関わりから」『世界の日本語教育』11：83-102，国際交流基金
5. 苧阪満里子（2002）『脳のメモ帳 ワーキングメモリ』新曜社
6. 小池生夫（編集主幹）、寺内正典・木下耕児・成田真澄（編集）（2004）『第二言語習得研究の現在』大修館書店
7. 齊藤真理子（1993）「The Oral Proficiency Interviewに表れた談話の分析：中級と上級の談話の型の違いについて」『文化女子大学紀要人文・社会科学研究』創刊号：31-41，文化女子大学
8. 佐久間まゆみ（1992）「接続表現の文脈展開機能」『紀要』41：9-22，日本大学文学部
9. 松岡弘（監修）庵功雄・高橋信乃・中西久実子・山田敏弘（著）（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
10. 寺村秀夫（1981）『日本語教育指導参考書5 日本語の文法（下）』国立国語研究所 大蔵省印刷局
11. 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則（2002）『複文と談話』岩波

書店

12. 深川美帆 (2002) 「日本語学習者の談話における接続表現についての縦断的研究」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻修士学位論文
13. 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
14. 森田良行 (1980) 『基礎日本語辞典』vol.2 角川書店